

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	蚤の異變：回顧録（二）
Author(s)	住江，金之
Citation	龍南， 2 3 8： 4 1 - 4 2
Issue date	1937-10-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7406">http://hdl.handle.net/2298/7406</a>
Right	

にはこれを省くこととする。今尙、御健在にて育英の事業に當らるゝ恩師方の御健康を祈り、東洋に、世界に複雑な場面の展開を見んとする今日、自然に、歴史に恵まれて居る母校に於て學びつゝある若き諸君の御奮勵を祈つてやまない。

(昭和一二、八、一七、野尻湖畔にて)

## 蚤の異變

住 江 金 之

焼けた後の寄宿舎はどんな風になつて居るか知らないが、吾々の頃(明治四十年頃)の寮は實にひどいものであつた。一階が自修室で一室八人詰、二階の寢室は十六人詰で、中央に板の間があり兩側に八尺幅の床があり、其上に疊一枚に一人づゝ寝るわけである。毎朝敷布團をくると後方にめくると床を上げた事になり、夜はそれを元の通り伸してもぐり込む。寢室の疊ときたらまるで醬油で煮しめた様に赤くなつて居り、恐らく寮が建つて以來一度も疊をあげて床の掃除などはされなかつたらうと思はれる。

十數年來五高健兒の血を吸うて肥りに肥り、生め殖えよで繁殖した蚤の一族が此疊に巢喰うて居たからたまらない。天下とるまじや大事な體

蚤に食はせてなるものか

とデカンショは歌ひ乍らも、毎晩蚤族の襲撃にはほと／＼參つて居つた。自分は殊に蚤嫌ひであるので中々以て寢付かない。眠れないまゝに布團の上を掌で撫でると面白い程ゴロ／＼採れて来る。

或時「一体何匹とれるか」といふ興味から、硝子瓶を枕元において採取した蚤を順次に入れて、毎日殖えるのを楽しみ

に觀察して居つた。

此處で頗る面白い事を發見したのは、蚤は晝間は靜かに眠つた様にジツとして居る。然も其の多くは一對の相手方を探しあてゝ生殖行爲をやつて居るが、夜になると各々活潑に運動する事である。斯くして卵を生みつけ、それが孵化して蛆となり、やがて蛹となり、更に小さな可愛いゝ子蚤が生れる。寄宿舎の不衛生も自分に對しては蚤の習性を研究する便宜を與へてくれた事を感謝する。

斯して毎夜蚤の採取が續けられ子蚤の發生が續いた。今は數百匹にも達したと思はれた或夜、實に今日考へても心魂に徹して恨めしい事には、隣床の某君の寢像の惡さから、大事な瓶を突き轉ばされ、念入りにも栓までとれて仕舞つた。永い間饑餓状態にあつた彼等が、其後如何に兇暴を逞しうしたかは想像の限であつた。此後自分が斷然蚤の飼育事業を中止したのは勿論である。

## 龍 南 回 顧 點 描

浦 本 浙 潮

龍南も茲に半世紀の歴史を持つようになつたと云ふことは洵に目出度いことであります。人材雲の如く輩出とは行かぬかも知れないが、日本文化の上に少からぬ寄與をしたであらうことは争へない。然しそのやうなことを顧ることは別に人ありでありましやうから、私は嘗そこはかとなき思出の凡人譜を綴つて、若しそれ以來久しくお目にかからない方々には、この紙上を藉りて御挨拶に代へ、又若し御存じ申上げない方々には、其頃の時代相の片影なり、或は同じやうな経験なりに、龍南の生活を回顧して、お笑ひ草の一つにもして頂ければ望外の幸せと思ひます。